



[teeta]



「テエタ」

「テエタ」はアイヌ語で“昔”を意味します。北の大地で繰り広げられた昔の人々の文化や環境を、現在と未来の人々に伝えるのが私たちの仕事です。昔のこと、古いことを広く知ってほしいという願いを込めて「テエタ」をこの冊子のタイトルにしました。



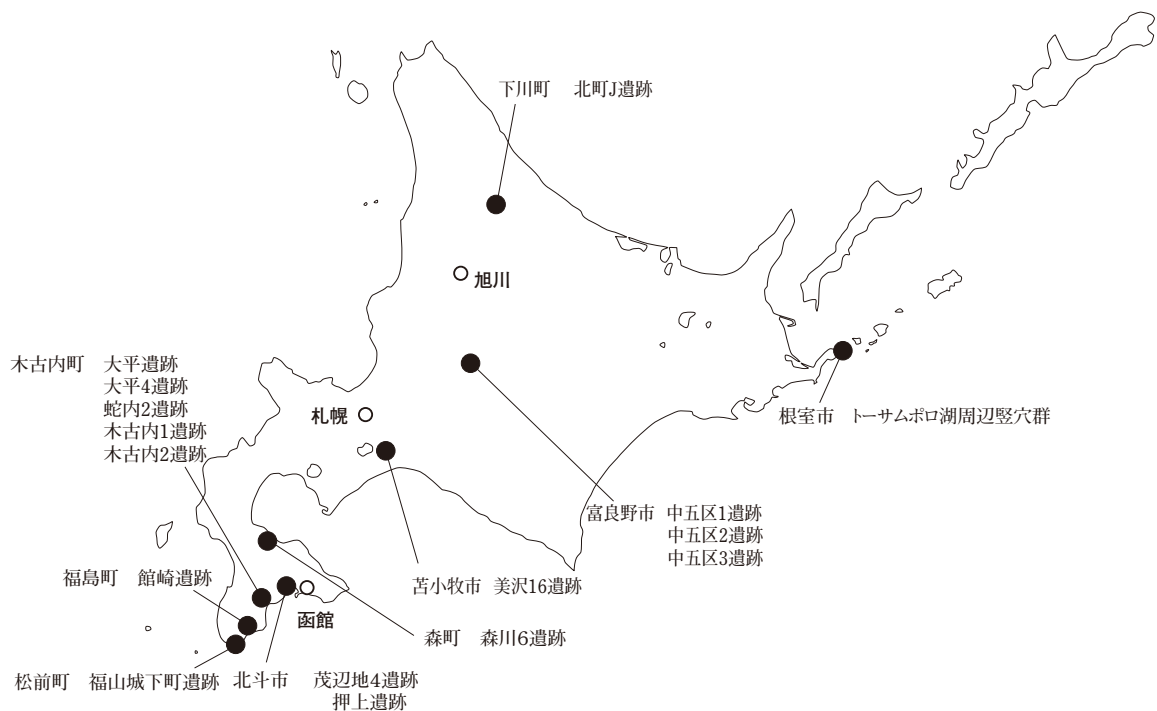
福島町館崎遺跡の墓（縄文時代前期末）

○平成22年度発掘調査遺跡	2
○平成22年度の調査	3
○木古内町札苅遺跡の調査から	6
○咲来(さっくる)という地名	7
○発掘調査の成果・・・	8
○人事異動	8

○平成 22 年度発掘調査遺跡

(平成 22 年 5 月 1 日現在)

委託者	事業名	遺跡所在地	遺跡名	調査面積(㎡)	備考	
国土交通省北海道開発局	札幌開発建設部	道央圏連絡道路新千歳空港関連工事に伴う埋蔵文化財発掘調査	千歳市	キウス5ほか	整理作業	旧石器・縄文・擦文時代
		新千歳空港ILS用地造成工事埋蔵文化財発掘調査	苫小牧市	美沢16	473	縄文時代前期
	函館開発建設部	高規格幹線道路函館江差自動車道函館茂辺地道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査	北斗市	館野ほか	整理作業	縄文時代中期～後期集落跡
				茂辺地4	83	縄文時代
	旭川開発建設部	天塩川サンルダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査	下川町	北町J	3,000	旧石器・縄文時代
		富良野市富良野道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査	富良野市	中五区2	2,510	縄文時代晩期
	網走開発建設部	北海道横断自動車道網走線訓子府北見間改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査	北見市	北上4	整理作業	旧石器時代
	(国土交通省 計)				10,956	
鉄道運輸機構	鉄道建設本部 北海道新幹線建設局	北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査	福島町	館崎	753	縄文時代集落跡・盛土
			木古内町	大平1	2,910	縄文時代前期・擦文時代
				大平4	1,817	縄文時代
				木古内1	6,890	縄文時代・擦文時代集落跡
				木古内2	980	縄文時代
			北斗市	蛇内2	850	縄文時代後期集落跡
北斗市	押上1	4,200	縄文時代			
(鉄道・運輸機構 計)				18,400		
北海道	渡島総合振興局 (函館土木現業所)	町道朝日豊岡線代行事業用地内埋蔵文化財発掘調査	松前町	福山城下町	300	江戸時代町屋跡
		森インター線交付金工事埋蔵文化財発掘調査	森町	森川6	2,060	縄文時代
	釧路総合振興局 (釧路土木現業所)	釧路鶴居弟子屈線(新交-61)交付金工事(幌呂原野地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査	鶴居村	下幌呂1	整理作業	縄文時代後期集落跡・盛土
		根室半島線(B交-408)交付金工事に伴う埋蔵文化財発掘調査	根室市	トーサムボロ湖周辺堅穴群	1,500	オホーツク文化期集落跡
(北海道 計)				3,860		
釧路町	町道床丹5号線道路改良事業埋蔵文化財発掘調査	釧路町	天寧1	整理作業	縄文時代晩期・続縄文時代	
合計				33,216		



遺跡位置図

○平成 22 年度の調査

とまごまい みさわ
苫小牧市美沢 16 遺跡

遺跡は、苫小牧市美沢の新千歳空港B滑走路の南側、フレベツ湿原に面する台地の西側斜面に位置します。この湿原の周辺は、縄文時代前期の遺跡が多く「フレベツ遺跡群」と呼ばれています。昭和 54・61 年度には新千歳空港建設工事に伴い美沢 4・5 遺跡を発掘調査しています。

美沢 16 遺跡は平成 7 年度に台地上の調査をしています。平成 21・22 年度は、この西側部分を調査しました。

遺構は、小型の竪穴住居跡 2 軒・土坑 7 基が検出されました。

遺物は、土器 178 点・石器類 224 点が見つっています。縄文土器は、厚手で胎土に繊維を多量に含み幅広い縄文が特徴です。石器は、石鏃・つまみ付きナイフ・スクレイパー・磨製石斧・すり石・たたき石・石錘・砥石などがみられます。これらの遺構・遺物もすべて縄文時代前期のものです。



調査状況

ふらのの なかごく
富良野市中五区 2 遺跡

遺跡は、JR 富良野駅から南側に約 4 km 離れた空知川左岸の低い河岸段丘に位置し、南側約 700 m に中五区 3 遺跡があります。このあたりは空知川の氾濫原であり、南東から北西方向に河道の痕がみられ、砂から 15cm 程の礫まで含む砂利層と遺物包含層の暗褐色の地層が列状に並んでいます。隣接する砂利の採取跡が調査範囲の一部に掛かっています。

遺構は、縄文時代晩期の焼土が 2 ヲ所と集石が 1 ヲ所見つかっています。

遺物は、タンネトウシ式土器が出土しています。手びねりで小形皿状の舟形土器が 1 個体見つかっています。黒曜石の剥片が多く、石器は石鏃の出土比率が高く、すべて黒曜石製の有茎石鏃のみです。



舟形土器の出土状況

ふらのの なかごく
富良野市中五区 3 遺跡

遺跡は、JR 富良野駅から南側に約 4 km 離れた空知川左岸の低い河岸段丘上に位置します。

遺構は、縄文時代晩期のもので、土坑が 15 基、焼土は 5 ヲ所、直線状に並ぶ配石が 2 ヲ所見つかっています。土坑は大半が直径 40 ~ 50cm、深さ 20 ~ 40cm の小形のもので、中には礎石や長径 30cm 程の礫の入ったものもあります。

遺物は、晩期の土器が多く、わずかに後期の土器も含まれます。石器は黒曜石で作られたものなどが多数出土しています。石鏃は有茎のものだけが出土しています。



土坑の発掘

きこない へびない
木古内町蛇内2遺跡

遺跡は、JR 木古内駅から北東へ約 2.8km、蛇内川左岸の標高 8～11m の海岸段丘上に立地しています。平成 21 年度に続く第 2 次調査となります。

遺構は、竪穴住居跡 7 軒、土坑 6 基が検出されました。竪穴住居跡のうち 6 軒は縄文時代後期前葉のもので、床面に石囲炉を伴うものが見られます。また、縄文時代前期後半の竪穴住居跡は、床面に 5 本の深い柱穴が掘り込まれていました。土坑のうち、縄文時代前期後半 2 基、同後期前葉 1 基の計 3 基がフラスコ状でした。縄文時代後期前葉のフラスコ状土坑は、口が粘土や礫で塞がれていました。

遺物は、縄文時代早期～晩期の土器・石器等約 12,000 点が出土しました。



フラスコ状土坑の断面（縄文時代前期後半）

きこない おおひら
木古内町大平遺跡

遺跡は、JR 木古内駅の北東約 2 km、標高は約 10 m の海岸段丘上に立地しています。

遺構は、竪穴住居跡が 24 軒、土坑が 6 基確認されています。竪穴住居跡は、擦文文化期 4 軒、縄文時代晩期 1 軒、その他は縄文時代前期と考えられます。また、縄文時代前期後半の盛土遺構が検出され、多量の遺物が出土しています。

遺物は、擦文文化期（9 世紀初頭）、縄文時代晩期後葉、前期後半のものが出土しています。



盛土遺構の土層断面（縄文時代前期後半）

きこない きこない
木古内町木古内1遺跡

遺跡は、JR 木古内駅から北へ約 1 km、標高 9～11 m 程の津軽海峡を望む台地上に位置しています

遺構は、縄文時代の竪穴住居跡 13 軒・土坑 60 基・T ピット 2 基・フレイク集中 3 ヲ所、擦文文化期の竪穴住居跡 2 軒、中近世の土坑墓 1 基などがみつかっています。縄文時代の竪穴住居跡は早期 5 軒・前期 6 軒・後期 2 軒で、早期後半の竪穴住居跡の中には直径 10 m 程の大型のものがああります。土坑は直径 1 m 未満のフラスコ状のものが多く、台地先端部に集中してみられました。擦文文化期の竪穴住居跡は、木古内町で初めて検出されたもので、出土した小型の鉢形土器から 8～9 世紀頃の時期と考えられます。



縄文時代前期の住居跡



擦文時代の竪穴住居跡

きこない きこない
木古内町木古内2遺跡

遺跡は、木古内1遺跡の南西約150m、標高10m前後の所に位置します。

遺構は、縄文時代前期後半の大型住居跡3軒、小型住居跡3軒、フレイク集中1ヵ所が検出されました。

住居跡で最も大きいものは、平面が約11×9mの楕円形で深さが約1.2mあります。床からは直径30～40cm、深さ60～80cmの柱穴が8ヵ所見つかりました。一方、小型住居跡は、直径約3m、深さ30～40cmの円形で、大型の住居跡よりもやや古いと思われます。大型住居跡の覆土の上層部や周辺の包含層では、縄文時代前期の遺物のほか後期初頭の遺物も見つかっています。

遺物は、約6,000点出土しました。



竪穴住居跡（縄文時代前期後半）

ふくしま たてきき
福島町館崎遺跡

遺跡は、北海道最南端の白神岬から北東に約6km、標高24m前後の海岸段丘上に位置します。調査は平成21年度から引き続き行っています。昨年度の調査ではほぼ全域が縄文時代前期後半から後期初頭にかけて形成された「盛土遺構」であることが判明しました。今年度は、竪穴住居跡26軒、墓壇1基、フラスコ状を含めた土坑36基等があらたに発見されました。土壇墓は長径1.5m程の楕円形で、遺体はやや膝を折り曲げた姿勢で埋葬され、腰の位置につまみ付きナイフがありました。また住居跡のベンチ上から側臥屈葬の人骨もみつかっています。多量の土器・石器のほか、板状土偶などの土製品があり、ほかに滑石製の球状耳飾が再生品も含めこれまで30点ほど出土しています。松前の海岸線には滑石の鉱脈が分布しており、大鴨津川流域では、肉眼観察ではありますが、質のよく似た転石がみられます。



盛土と重複する住居跡や墓

○木古内町札苧遺跡の調査から

縄文土器には、何故、多種・多様な文様が描かれなければならないのでしょうか。

それを強く感じたのは、昭和60年(1985年)、木古内町札苧遺跡を調査したときでした。その調査で、縄文時代晩期初頭(大洞B2式相当)の縄文・沈線文が施された大・小の深鉢・壺形土器が9個体、無文土器8個体が出土しました。無文土器は小型の浅鉢・台付・皿形で、調整は丁寧で、焼成も良く、いずれも装飾的な要素が取り除かれたシンプルな器形で、機能面では完成されたもののように思われました(図1~3)¹⁾。

札苧遺跡は、それまで2度の調査が実施され、晩期中葉~後葉の東北北部の大洞C1式~大洞C2式期の土器が出土し、札苧I群土器・札苧II群土器と呼称されていました。これらは前者に後続し、雲形文・入組文・工字文等の磨消文が器面全体に施され、口縁部に突起が加えられるなど、装飾性に富む土器群です(図4~6)²⁾。

札苧遺跡では晩期初頭の頃には、土器の組成の一部とはいえ、機能的で、完成された器形のもの製作されているにもかかわらず、晩期中葉~後葉の頃になると、機能を度外視したような土器が製作されるようになったことは何か納得がいきませんでした。それは「機能的で完成されたもの」→「機能を度外視したようなもの」の変遷が「使い勝手がよいもの」→「使い勝手が悪いもの」への変遷と理解され「生活の快適さ」からの後退としか思えなかったからです。

その後、私たちにとって一見「使い勝手が悪いもの」への「不合理な変遷」が縄文時代を通し頻繁に認められることが分かってきました。例えば、早期~前期の平底土器→尖底土器、尖底土器→平底土器へ目まぐるしい変遷の繰り返し、また、胎土に繊維を含まない薄手の土器から多量の繊維を含み、器壁が分厚く、重い脆弱な土器への変遷があります。この変遷は早期末の東釧路系土器群から前期の綱文式や中野式などへの変遷に認められ一見したところ「使い勝手が悪いもの」への変遷といえます。この変遷は、中部以東の東日本で認められ、多量の繊維を含む土器は繊維土器と呼称され、早期末~前期に至る時期に限られていると考えられています。澤四郎氏は道東部の繊維土器の一型式である東釧路V式を「北海道の先史時代の中で、もっとも製作技術が拙劣な土器」・「壊れやすい持ち運び不便な土器」と述べたことがあります³⁾。

前期初頭の頃の北海道は、東北北部の影響が認められる土器がほぼ全道から出土し、東北北部を含む大文化圏に属し、モノ・ヒトの交流を窺わせています。渡辺誠氏によれば、この時期、縄文海進による穏やかな環境に適応し、狩猟・漁撈・植物採集の食料獲得手段が発達、大規模集落・貝塚を形成し、安定的な定住生活を営んでいたと考えられています⁴⁾。その後、食料獲得手段は一層発達し、自然物の高度利用段階に入り「安定的な定住生活」は、地域間相互の交流・依存度を希薄なものとなり、小文化圏を形成されると考えています。

この時期、北海道においても同様の環境・生活の変化によって、道南・道央・道東に地域差が生じ、地域性の強い土器を出現させたと論じたことがあります⁵⁾。そして「持ち運び不便な土器」は、自己完結的な小文化圏の中で運搬用具としての用途の希薄化を示し、据え置き的な用途が一義的なものとなり、「使い勝手が悪いもの」ものでも何ら不都合がなく、受け入れられたのではないのでしょうか。

この様に土器は、自然環境・生業の変化による生活の変化、地域間相互の交流の影響・用途の細分化、使用する場所の違い等の外的要因と土器の製作者・使用者による文様構成・器形の省略・強調・取捨選択や精神性の表現等の内的要因が複雑に絡み合いながら一見「不合理な変遷」や「合理的変遷」を繰り返し、連綿と変化をして行くと考えられます。したがって、土器の変遷を理解するためには、目前の土器が連綿と続く変遷の一瞬に他ならないことを認識し、製作者・使用者を取り巻く自然環境・生業・地域間相互の交流等を考慮しなければならない。

- 文献
- 1) 野村 崇 1975『札苧遺跡』木古内町教育委員会
 - 2) 野村 崇 1976『札苧』北海道開拓記念館
 - 3) 澤 四郎 1985『釧路の先史』
 - 4) 渡辺 誠 1985「縄文の食生活」『考古学ジャーナル』No256
 - 5) 熊谷仁志 2008『知床の考古学』「前期」知床ライブラリー9 斜里町知床博物館

(第1調査部第4調査課長 熊谷仁志)



札苧遺跡出土の土器

○咲来（さっくる）という地名

今回私が取り上げる遺跡は、天塩川改修工事に伴い、平成2年と3年に2か月ずつ発掘調査を実施した道北の音威子府村『咲来2遺跡・咲来3遺跡』です。調査の結果、咲来2遺跡（A地区）から縄文時代中期後半の土坑群（土坑14基）と約26,000点の遺物が出土し、中期後半の北筒式土器が13個体復元されました。

今回は、調査の内容ではなく遺跡名になっている「咲来」（さっくる）という地名に焦点をあててみます。

音威子府村の咲来（さっくる）はアイヌ語のサク・ル（sak-ru 夏・道）の意だそうです。これに対してマタ・ル（mata-ru 冬・道）というアイヌ語があります。夏と冬の道があることからアイヌの人たちは、狩猟や交易のため遠方へ行くとき季節によって交通路を使い分けていたようです。サク・ル（夏の道）、マタ・ル（冬の道）というアイヌ語は、北海道内の川名、地名などにあります。音威子府村のサク・ルを含め道内の類例をいくつか紹介します。

①パンケサックル川

音威子府村咲来市街の南にパンケ（下の）・サックル川とペンケ（上の）・サックル川が並んで東から天塩川に入ります。アイヌの人たちはこのパンケサックル川に沿って道を上り、咲来峠（236m）を越えて北見の幌別川筋に下っていたようです（北見道路）。このほかにも天塩川筋からは海産物を入手するためか、所々に北見との通路があるようです。

②サックル川とサクルー川

天塩川源流に東北から入る川名、地名、山名。柵留、咲留と書き、サックルと呼ぶ。現在、岩尾内ダムに注ぐサックル川（士別市）を遡り、標高約680mの峠を越えて北見のサクルー川（渚滑川支流）に出て、それを下ると滝上町市街です。ここが天塩川源流地帯と北見との交通路の筋だったようです。北見側のサクルーは札久留とも書かれます。柵留山（852.4m）は士別市、下川町と北見の滝上町の境の山で、サクルー川の水源地の山ということから名前が付けられたようです。

③ルシャ川とルサ川

ルシャ川（斜里町）は、知床半島の硫黄山（1562m）と北の知床岳（1253.9m）の間からオホーツク海側へ流れる小川の名。ルエシャニ「ru-e-shan-i 道が・そこで・浜の方に出る（下る）・処→坂」が略され、ルーシャニ、ルーシャとなったものだという。この山向こうの根室海峡側（羅臼町北浜）にも同名のルサ（ルシャ）川があり、この二つのルシャ川の水源地は半島の一番低い処が（標高約280m）、古くからの交通路であったようです。また、この二川はともに上流が二股になっており、斜里側の方はマタ・クシ・ルシャ（冬・通る・ルシャ川）、シャク・クシ・ルシャ川（夏・通る・ルシャ川）、羅臼側の方はマタ・ル（冬の道）、シャク・ル（夏の道）と呼ばれ、各々その水源地が相対しています。

④サックルベツ川

後志利別川上流の今金町でこの川が大きく曲がって南に入り込んだ処の南支流（奥沢の辺）の名前です。この沢を上って山越えすると遊楽部川筋で、そちら側にもサックルベツ川があります。ここが噴火湾側の八雲の辺との交通路の沢だったらしいようです。現在、奥富林道がほぼ同様のルートに付けられており、峠の標高は約300mです。

道内にはこの他にもサックル、サクルという地名、川名があります。そしてほとんどの場合近くにはマタル（冬の道）という川名があり、サクル（夏の道）と対になっていることが多いようです。このような交通路はアイヌ文化期に突然発生したのではなく、それより古い縄文時代からうけつがれてきたのではないかと考えられます。

参考文献

山田 秀三 1984『北海道の地名』北海道新聞社
財団法人 北海道埋蔵文化財センター
1992『咲来2遺跡・咲来3遺跡』（北埋調報73）

（第2調査部第2調査課長 佐川 俊一）

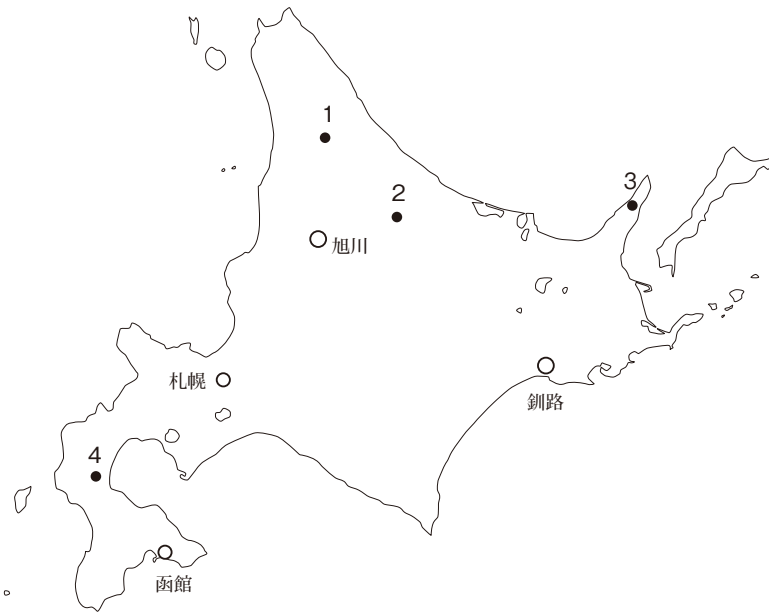


図 北海道にみられるサックル、サクルーという地名
（図中の黒丸の番号は、文中の①～④の地点を示す）

担当調査員のこころに残ったセンター調査遺跡・遺物

広報誌「テエタ」が創刊された平成9年3月以前に当センターが発掘調査した遺跡・遺物等について、当時の担当調査員のこころに強く印象が残っていることがらを連載することにしました。第1回目は、熊谷課長と佐川課長が執筆しました。

○発掘調査の成果・・・

今年のNHK大河ドラマ「龍馬伝」が人気とのことで、故地高知や京都、長崎では大勢の観光客で賑わっているようです。龍馬自身とは直接関係ありませんが、幕末期の北海道では、「箱館奉行所」（正式には「箱館御役所」）が1864（元治元）年に五稜郭に移転し、1871（明治4）年に解体され、それから約140年後、古い写真や絵図面・古文書のほか発掘調査結果をもとに4年の歳月と約17億円の費用をかけて復元され、7月29日から一般公開されましたが、ご覧になりましたか。発掘の成果は目覚ましく、確認された遺構と絵図面・文献類とがかなり高い精度で一致し、また遺物として多かった屋根瓦は、釉薬の分析から越前産の棧瓦・軒瓦と特定され、「箱館奉行所」は日本伝統の技により太鼓櫓のある威厳に満ちた建物に蘇りました。

北海道に龍馬の足跡はありませんが、彼は幕府解体で職を失う若き武士達を北海道の防衛と開拓につかせようと壮大な計画を立て、渡道のため船を準備していた矢先、ご存知のように1867（慶応3）年に京都・近江屋で中岡慎太郎とともに殺害され、宿願は果たされませんでした。しかし、明治新政府になって龍馬の跡目を継いだ甥の坂本直、直寛兄弟をはじめ後裔の方々が北海道に深く関わっておりますので、函館市十字街にある北海道坂本龍馬記念館やそのホームページを訪れてみてください。

なお、市立函館博物館では、箱館奉行所復元記念企画展として「幕末の動乱と蝦夷地への道」を9月26日（日）まで、また特別展「縄文の至宝－世界遺産をめざす15遺跡と土偶－」を同日まで開催していますので、残り期間わずかですが、併せて是非ご覧ください。

さて、函館市の宣伝ばかりになりましたが、当センターの今年度の話題をひとつ。設立以来31年目にして初めて城下町を発掘することになり（北海道の城下町といえば唯一無二ゆえ当然といえば当然でしょうが）、お盆明けから調査を開始しております。調査地は町家跡と推定されており、どんな成果が得られるか、乞うご期待。

第18号を最後に遠ざかっていましたが、この4月から3度目の勤務をしておりますので、今後ともよろしく申し上げます。
（第1調査部長 千葉 英一）

○人事異動

○採用

千葉英一	第1調査部長	(4月1日付)
前田克己	総務部総務課参与	(4月1日付)
増田幸政	総務部業務課参与	(4月1日付)
徳田京一	総務部業務課参与	(4月1日付)
佐藤和雄	第1調査部第3調査課主任	(4月1日付 再雇用)

○退職

越田賢一郎	第1調査部長	(3月31日付)
松本 繁	総務部総務課長	(3月31日付)
吉田貴和子	総務部会計課長	(3月31日付)
佐藤和雄	第2調査部第2調査課長	(3月31日付)
石田八朗	総務部総務課参与	(3月31日付)
山本昌利	総務部業務課参与	(3月31日付)

○昇任（4月1日付）

葛西宏昭	総務部総務課長	総務部総務課主査から
礪田千秋	総務部会計課長	総務部業務課主査から
小杉 充	総務部総務課主査	総務部業務課主任から
小笠原学	総務部業務課主査	総務部業務課主任から
芝田直人	第1調査部第3調査課主査	第1調査部第3調査課主任から
影浦 覚	第2調査部第1調査課主査	第2調査部第1調査課主任から
袖岡淳子	第2調査部第2調査課主査	第2調査部第4調査課主任から
愛場和人	第2調査部第3調査課主査	第1調査部第2調査課主任から
阿部明義	第2調査部第3調査課主査	第2調査部第2調査課主任から

◆交通案内◆

- ・JR 大麻駅から、徒歩約20分
- ・新さっぽろバスターミナル発
 - ・JRバス（文教通西循環線）かタ鉄バス（文京台南町行）に乗車「くりの木公園前」下車、徒歩5分
 - ・JRバスかタ鉄バス（江別方面行き）に乗車「北翔大・札学院大前」下車、徒歩15分

